

ハンガーゼロ (日本国際飢餓対策機構) は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体 (NGO) です。1981年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、海外スタッフ派遣、飢餓啓発を行っています。現在は、国際飢餓対策機構連合 (Food for the Hungry International Federation) の一員として、18カ国60のパートナー団体と協力し、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、「ここからだの飢餓」に応える活動をしています。

2023世界食料デー ポスターが完成!!

ハンガーゼロは、今年も9月から11月を世界食料デー月間として、全国各地の支援者様とともに飢餓啓発、募金運動を行います。対面形式の世界食料デー大会、キリスト教会での世界食料デー礼拝、関連の各種催事などが繰り広げられます。ハンガーゼロスタッフの講演や現地報告、食料デー動画公開 (複数) も用意しています。ぜひ飢餓のない世界 (ハンガーゼロ) の実現のためにご協力をお願いいたします。



【インド】紅茶ムンガラー& ロックハート紅茶のセット

ミルクティーやチャイに最適なインドのオーガニック紅茶ムンガラーと人気のロックハート紅茶の組み合わせです。
ムンガラーとティーバッグ (A セット)、ムンガラーとリーフ (B セット)

のどちらかお選びください。2袋セットを送料込み2,000円でお届けします。

(ティーバッグは2g x 20包、ムンガラーは100g、リーフは70g)
お支払い：原則として銀行振り込み、また郵便振替の後払い

※送金は必ずキングダムビジネスまでお願いいたします。ハンガーゼロでは一切お受けできません。

お申し込み：

(株)キングダムビジネス
スマートフォンは右のQRコードから

電話注文：06-6755-4877



【トルコ地震緊急募金】

募金は…①郵便振替 ②ホームページからのクレジット
カード決済利用の2種類

①郵便振替 00170-9-68590

一般財団法人日本国際飢餓対策機構「トルコ地震」と必ず明記

②ホームページ 募金画面からクレジットカードまたはコンビニ決済がご利用いただけます。



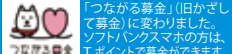
■発行者 清家弘久

■発行所 一般財団法人 日本国際飢餓対策機構



Webサイトアドレス <http://www.hungerzero.jp>
eメールアドレス general@jifh.org
フェイスブック facebook でハンガーゼロで検索

■募金方法 ※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウェブサイト
①郵便振替 00170-9-68590 一般財団法人日本国際飢餓対策機構
②他の金融機関からの自動振替③クレジット、デジタルコンビニ



●Tポイントを利用して「南スーダン・マブイ小学校給食支援」ができます。現在までに1,640,418ポイント (円) のご協力 (24,986件) がありました。Tポイント募金で検索。
●「つながる募金」はスマートフォンからご利用できます。募金は、ソフトバンクモバイル(株)経由となります。詳しくはウェブサイトをご覧ください。

大 阪 〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1

(広島/沖縄) TEL (072) 920-2225 FAX (072) 920-2155

東 京 〒101-0062 千代田区神田駿河台 2-1 OCCビル 517号室

(東北) TEL (03) 3518-0781 FAX (03) 3518-0782

愛 知 〒460-0004 名古屋市中区新栄町 2-3 YWCAビル 6F

TEL (052) 265-7101 FAX (052) 265-7132

U S A Ainote International c/o Mr. Takehiko Fujikawa

8010 Phaeton Dr. Oakland, CA94605

TEL (510) 568-4939 FAX (510) 293-0940



Hunger Zero



JIFH



チャイルドサポーター

わたしから始める、世界が変わる

Hunger Zero News

ハンガーゼロ・ニュース

1分間に17人 (内12人が子ども)
1日に2万5,000人が
1年間では約1,000万人が
飢えのために生命を失っています

2023

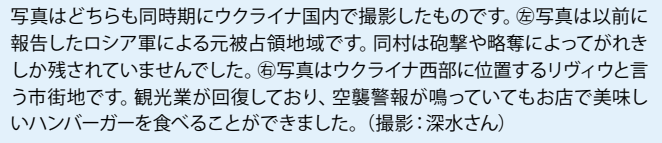
8

No.397



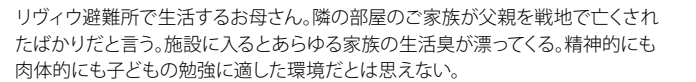
Hunger Zero News 今月号の内容	
ウクライナ緊急支援/深水報告②	P.2-3
HOLPFI/アルサビ支援終了式典	P.4-5
チャイルドサポーターの活動報告	P.6
ボリビア・小西駐在員連載②	P.7

写真：フィリピン HOLPFI 活動報告



希望の光を見失わずになお支援を続ける人々

いまウクライナでは国内においても空気感の違いがあります。それは軍事衝突のほとんどがウクライナ南東部で行われているためです。この地域に住む多くのウクライナ人はロシア語しか話すことができません。ウクライナの公用語はウクライナ語ですが、元は旧ソ連の構成国なので、全土においてロシア語も広く理解されています。また、ここは親露派運動の盛んな地域でもありました。僕が支援を通して出会う避難民たちもロシア語のみを話す人がほとんどです。ここで想像していただきたいことは、ロシアとの戦時下において、ウクライナ西部・中部（ウクライナ語を生活言語とする地域）で避難民たちが直面している生きづらさです。ロシア語を話すと売店で無視されてしまうことがあります。ロシア語が全面禁止になるというフェイクニュースに怯えることがあります。また、避難民であるのにスパイだと疑わ



下の写真の家族のようにもともと社会からあぶれていた人たちは、支援からも隠されてしまうことがあります。私たちはこうした貧しい避難民に食料や住居費の支援を行っています。ウクライナ国内には様々な人道支援団体があり、大きな団体は幅広く多くの人々を支援しています。また、私たちのように小さな団体は、大きな支援の網からすり抜けてしまった人々を支えています。大小問わず、みなで尽力しています。けれど社会の抱える闇はより深淵です。この家





2023年6月18日～23日、ハンガーゼロのフィリピンにおけるパートナー団体の1つであるハンズ・オブ・ラブ・フィリピン(HOLPFI)の活動地を訪ねました。



支援終了を喜び合えるコミュニティ開発(VOC)

今回の訪問の目的は、7年間(関係作りを入れると9年間)支援してきた HOLPFI の手を離れて、アルサビ村のリーダーたちが地域変革を進めていくという区切りのお祝いに出席することでした。式典は村の入り口にある教会の会堂で行われました。アルサビ村を管轄するフォツナ町の町長さんが町会議員全員と参加してくださりお祝いの言葉を述べられました。私もハンガーゼロを通して支えてくださっている支援者の皆さんを代表して、お祝いと励ましの言葉を述べさせて頂きました。これまでのアルサビ(旧マイ)村と HOLPFI の歩みを振り返る動画が流れ、功績のあった方々やリーダーたちが表彰されました。続いてリーダーのあるべき姿を教えるために弟子たちの足を洗ったイエスの模範に倣い、代表を務めている酒井保(ハンガーゼロ派遣職員)をはじめとする HOLPFI の皆さんやハンガーゼロの代表として私が村のリーダーたちの足を洗い、その後、リーダーが村の若者や弱い立場の方々の足を洗いました。また教会の賛美チーム、村人たち、HOLPFI のスタッフなどの歌が

披露され、会堂に入りきれないほどの村人が集まりました。

祝い食事会の中で住民の宣誓文を披露

式典の後は、お祝いの食事会です。ハンガーゼロと HOLPFI から豚とスイカをお祝いとして差し入れし、村のリーダーと HOLPFI のスタッフが朝早くから200人分の食事の準備をしてきました。豚が食べられるのは、1年に1度あるかないかの大ご馳走です。村人たちは大人も子どももお皿やバナナの葉っぱを持って大行列を作りました。食事が済むと、集まった村人たちの前でリーダーが「これからも様々な資源を活用し、主体的にコミュニティ開発を進めていきます」という内容の宣誓文を読み上げ、リーダーたちをはじめとする村人が次々と宣誓文が書かれたバナーに署名(表紙写真参照)していきました。その後はくじ引きでプレゼントをもらったり、聖書クイズやゲームをして楽しいひとときを過ごしました。



功労者を表彰するHOLPFI酒井スタッフ



洗足をする浅野スタッフ



料理を準備するHOLPFIスタッフ



宣誓文の披露



村の功労者の前村長さんと



式典には村を管轄するフォツナ町の町長や町会議員の皆さんもお祝いに参列されました

大盛況の祝いの食事会



住民主体(VOC)らしさが着実に浸透

今回の訪問で印象的だったのは、HOLPFI スタッフと村人の間に「与える者と受ける者」という一方通行ではない、良い関係が築かれていると感じられたことでした。それは、アルサビ村の人たちから「支援者」の訪問を歓迎する歌や踊りの派手な出迎えがなかったこと、スタッフや私たちの食事のために里芋などの農作物が届けられたこと、また HOLPFI がマイ村に通い出した頃には、高床式の家を建ててくれたと聞いたことなどから感じ取れました。この9年間 HOLPFI が行ってきた、住民が主体となるコミュニティ開発であるビジョン・オブ・コミュニティ(VOC)の成果が、すぐく自然な形で表れているのを見ることができ、とても感謝しました。



式典準備を手伝う酒井慶子スタッフ

最初に取り組むべき課題として住民が子どもの教育を挙げ、リーダーが熱心に粘り強く小学校の誘致に動いたことも今に大きな影響を与えています。こんな辺境の地では、嫌々送られてきた教師が、任期が終わるや否や町に戻ってしまうのが常ですが、今アルサビ村にいる先生は、任期が終わった後、志願して来てくれたと聞きました。3～6年生を担当している男性の先生2人はとても明るく元気で、授業以外の時もいつも子どもたちと過ごしていました。以前、村の人たちが総出で建てた校舎の裏には菜園ができていて、先生が生徒と野菜の世話をしていました。先生の

一人は、住民が家の庭にバナナの木を植えたり花を植えたり、HOLPFI が来て生活が少しずつ文化的になってきていると嬉しそうに語っていました。学校で学んでくる子どもたちを通して、家族も村の生活も少しずつ変化していったようでした。

教師と保護者が話し合って課題解決

市の予算がついて建てられた新校舎で9月から授業が行われると聞きましたが、机や椅子はもう3年も要請しているのに行政から回答がないので先生と保護者が話し合い、周りにある資源を使って各家庭で椅子を作り子どもたちに持たせることに決めたそうです。

今後、中学・高校へと進学する子どもの教育費のために生計の安定をはかることや、村人の栄養状態の改善も必要



村の人たちが子どもたちのために建てた学校

です。自治会や教会の役員、学校の先生などアルサビ村の様々なリーダーたちが協力して課題を認識し、活用できる資源を見つけ、自分たちが描く未来の姿(ビジョン)に向かって進んでいくとともに周りの村を手助けし、持続可能な変革が広がっていくように願っています。

HOLPFI のスタッフはこれから、アルサビ村のフォローアップをしつつ、新たに関わっていく村を特定するための調査と関係作りを続けていきます。アルサビ村の今の姿の裏には、HOLPFI の皆さんの献身的な働きがあります。今回のアルサビ村訪問で「人への投資こそが持続可能な変化を生む」ということを改めて確認した思いがします。

(報告：海外事業部 浅野陽子)



柳瀬スタッフは映像記録を担当

初めての支援地訪問で気づいたこと／柳瀬スタッフ

出発前はフィリピンやアルサビ村の生活がほとんど想像できませんでした。実際に足を運び、服を着ていない幼い子ども、あまり頑丈ではなさそうな家、食器や日傘代わりの葉っぱなど、日本では見られない光景を目にしたとき、珍しく感じつつもそれがこの村の人々の日常なのだと気がされました。途上国、貧しい、支援を受ける者、など自分と支援地との間に無意識に置いていた線引きから解放されて、たゞそこで生きている人たちと出会うことができた、それが私にとって一番の収穫です。



HOLPFIの活動には、ハンガーゼロサポーターと2022年世界食料デー募金他を用いさせていただきます



カスケードグループ (CASCADEグループ)

FHは地域で活動を効果的に拡大させるための方法として、「カスケード (CASCADE) グループ」を形成しています。カスケードとは「連続した小さな滝」また「液体や小さなものの滝状の流れ」と辞書にあります。つまり、滝のように落ちていく水がどんどん広がり、周りに影響を及ぼす、それがカスケードグループです。

地域変革の流れが広がる…

FH スタッフの訓練を受けた地元スタッフは、その地域に形成された「カスケードグループボランティア」に学んだことを伝え、訓練していきます。カスケードグループボランティアは、積極的に地域から信頼され、模範となるような人々によって構成されています。彼らが学んだことを自分の村で実践しながら、周りの人々に伝えていくことで、地域全体が多くの情報や知識を共有することができるようになります。

FH スタッフは数人の地元スタッフを訓練しますが、その地元スタッフたちによってカスケードグループのボランティア数十人が訓練を受け、その数十人によって地域に住む多くの人々に大切なメッセージが伝えられます。このようにして数百人に及ぶ人々に活動の大切さが滝を下る水のように共有され増え広がります。

カンボジアのバン・ミリアに住む一人のカスケードグループボランティアのお母さんは、保健衛生を推進する働きをしています。以前は、家の周りにゴミを放置していて、子どもたちが下痢になったりするような生活環境でした。

FH の活動に参加することを決めた彼女は、教えられたことを忠実に実行して子どもたちの健康状態がよくなったことを体験しました。家の周りにゴミ箱を設置し、清潔さを保つことの大切さや、健康に関する知識を近隣に分かち合っています。

彼女の取り組みにより、隣の家族、また道を隔てた家族もゴミ箱を設置するようになりました。彼女はさらにゴミを分別し、リサイクルするようになり、リサイクルできるものを回収業者に買い取ってもらっていくらかの収入も得ています。

「理解を示さない家族もありますが、私自身が地域の良いモデルとなることが大切です」と自信をもって語ってくれた彼女の姿がとても美しく見えました。



手洗いを実践する

FH= 国際飢餓対策機構

私たちロングライフグループは、ハンガーゼロの活動を応援しています。

ロングライフは1986年の創業よりケアサービスひと筋。全国に展開しています。

Health & Natural Beauty
ロングライフグループ Resort A LongLife
 大阪本社／〒530-0015 大阪市北区中崎西2-4-12 梅田センタービル25階 東京本社／〒100-0004 東京都千代田区大手町1-6-1 大手町ビル9階
 ロングライフグループ拠点：北海道／埼玉／東京／神奈川／千葉／静岡／愛知／大阪／兵庫／京都／大分／沖縄／中国（青島）／韓国／インドネシア（ジャカルタ）

0120-550-294

受付時間
9:00～18:00
年中無休



ロングライフタウン寝屋川公園 フィレンツェの丘

連載〈22〉



私が2023年3月14日にボリビアに戻るとすぐに、高地担当スタッフから「サユリ、ビラビラ村のオクタビアちゃんが、学校をやめようとしている」と相談がありました。

オクタビアちゃんは高校2年生で小学4年と1年生の弟がいます。彼女の村は山の上で現在5、6世帯しかなく、分校の小学校は生徒数が10人を切って数年前に廃校になり、姉弟は毎日山から下りてアサワニセンター校に通学しています。

彼女の家には、数年前に市役所が設置した小さなソーラーパネルとバッテリーで発電した電灯が1個あります。その明かりで宿題をしていたのですが、去年バッテリーが故障しそれが使えなくなってろうそくになりました。

彼女はろうそくの明かりだけでは宿題をすることが困難になり、気落ちして学校をやめると校長先生に言いに行ったそうです。「心配した校長先生から3月10日付で“この家庭はとても貧しく、バッテリーを買う余裕など全くない。どうかFH（注）で支援してほしい”という要望書が出されたが、事務所にはその資金がなく思案していたところだ」と担当スタッフ。

支援金でバッテリーを購入

私はこれを聞いた時、神様が今この子の家族を支援するようにと、私を丁度この時期にボリビアへ戻して下さったのだと思いました。そして小西支援金の一部を用いてバッテリーを購入さ



変わるものとも
変わらないもの



ボリビア多民族国
駐在 小西小百合



せて頂き、4月5日に他のスタッフと一緒に事務所の4輪駆動車でアサワニ入りました。

子どもたちは学校から山の上まで道なき道をものすごい速さで登っていくため1時間ほどで着くそうです。しかし私たちは学校の許可を得て早退したオクタビアちゃんの道案内の元、車で行けるところまで行き、そこからゆっくりと山の斜面をバッテリーを運びながら登っていきました。バッテリーはとても重かったのですが、男性スタッフ2人が運んで下さったのでとても助かりました。数年前と比べて車やバイクで行ける道が延長されたため、私たちは2時間半程の登山ですみました。高地で息切れしつつも、なんとか休み休み登りきることができました。



無事電気が回復しました（右にソーラーパネル）

そして泥レンガとわらぶき屋根の1部屋に家族5人が住むオクタビアちゃんの自宅に着くと、工具も無い中、スタッフが手作業の電気工事(?)をして、修理は完了。電気は回復しました！私たちは彼女を励まし、このご一家の祝福を祈りました。

オクタビアちゃんに笑顔が戻って、その後子どもたちは頑張って勉強をしていると聞き、とても嬉しく思っています。彼らが変わらず笑顔でいてほしい。そして、これからも将来の夢に向かって歩いてほしいと心から願いました。

注) FH=Food for the Hungry 国際飢餓対策機構